南房総市宮ノ台遺跡

－一般国道 127 号久保トンネル改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－

平成 27 年 3 月

国　　土　　交　　通　　省

公益財団法人　千葉県教育振興財団

南房総市宮ノ台遺跡

みなみ ぼう そう し みや だい い せき

－一般国道 127 号久保トンネル改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－

序　文

公益財団法人千葉県教育振興財団は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第741集として，国土交通省による一般国道127号久保トンネル改築工事に伴って実施した南房総市宮ノ台遺跡の調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，危険防止のため発掘調査は実施せず，地形測量及び現地踏査でしたが，南東の谷津を挟んだ国指定史跡里見氏城跡岡本城跡に関連するとみられる城郭遺構などが確認され，この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，本書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関，また，整理作業に御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成27年３月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　堀　田　弘　文

凡　例

1　本書は，国土交通省による一般国道127号久保トンネル改築工事に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県南房総市富浦町豊岡字久保825-12ほかに所在する宮ノ台遺跡（遺跡コード234－002）である。

3　調査から報告書作成に至る業務は，国土交通省の委託を受け，公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　調査及び整理作業の組織・担当者及び実施期間は，第１章に記載した。

5　本書の執筆・編集は，主任上席文化財主事井上哲朗が担当した。

6　調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，南房総市教育委員会生涯学習課，国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所，青木あすなろ建設株式会社，近藤匡樹氏，南房総市富浦町豊岡在住の方々の御指導・御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は，以下のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図「那古」（NI-54-26-2-4）（平成16年発行）

第２図　参謀本部陸軍部測量局発行　第一司管地方迅速測図「船形村」1/20,000（明治16年測量）

第３・４図　国土交通省作成の久保トンネル等改築計画平面図を基に，新たに事業範囲の測量成果および周辺部の現地踏査成果を加筆した。

第５図　旧富浦町発行　富浦町地形図（IX-ND59-2･50-1）1/2,500（平成３年測量）を一部改変した。

8　地形測量は，調査担当者の現地指示のもと，有限会社無限測量設計に委託して作成した。

9　図版１の遺跡周辺航空写真は，京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

10　本書で使用した座標は，世界測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第９系）であるが，一部には日本測地系座標値を併記した。図面の方位はすべてその座標北を示す。

目　次

第１章　はじめに…… 1
第１節　調査の概要…… 1
1　調査の経緯…… 1
2　調査の経過と概要…… 1
第２節　遺跡の位置と環境…… 3
1　地理的環境…… 3
2　歴史的環境…… 3
第２章　城郭遺構と周辺集落…… 5
第１節　事業範囲内…… 5
第２節　周辺丘陵内…… 9
第３節　周辺集落…… 15
第３章　まとめ…… 15

報告書抄録…… 巻末

挿図目次

第１図　位置と周辺遺跡……２
第２図　明治時代地形図……４
第３図　地形測量図……７・８
第４図　周辺地形測量図……11・12
第５図　周辺丘陵・集落現況図……13
第６図　岡本城跡概念図……14
第７図　岡本城下集落現況図……14
第８図　周辺部写真撮影位置・方向図…図版扉裏

図版目次

図版１　周辺航空写真
図版２　遠景
(1) 大房岬から (2) 八幡神社から
(3) 聖山トンネルから
図版３　(1) 大房岬・坂ノ下集落 (2) 岡本城跡・久保集落 (3) 岡本城跡
図版４　(1) 尾根頂部全景 (2) 尾根頂部～東斜面全景
図版５　(1) 西斜面全景 (2) 東斜面全景
図版６　(1) 西斜面北部 (2) 西斜面南部
(3) 西側谷津内
図版７　(1) 東斜面 (2) 東斜面南部 (3) 東斜面北部
図版８　事業地尾根上部・西谷津斜面
(1) 事業地北端部尾根上階段状整形, (2) 北端部尾根上階段状整形 (3) 尾根上南部段整形 (4) 東斜面竪堀状整形 (5) 尾根上南部石墨状整形, (6) 南端部東斜面段整形 (7) (6)左下の石垣 (8) 西谷津北部斜面の石垣
図版９　事業地西斜面～東斜面
(1) 西斜面北部 (2) 西斜面北部隣接平場 (3) (2)平場奥の横穴墓 (4) 西斜面北部事業地境界部 (5) 西斜面北部稲荷祠窟 (6) 西斜面上部崩落個所 (7) 北西端西側の階段整形 (8) 東斜面段整形
図版10　事業地東斜面・事業地外尾根基部
(1) 東斜面南部 (2) 東斜面中央部
(3) 東斜面北部 (4) 東斜面下部 (5) 久保トンネル上の小横穴 (6) 事業地北東側斜面の横穴墓 (7) 事業地北側尾根基部の段整形 (8) 尾根基部の空堀状谷津(B)
図版11　事業地外尾根基部～北方丘陵
(1) 尾根基部の空堀状谷津頭 (B) (2) 空堀状谷津西の尾根上平場Ⅳ (3) 北方丘陵平場Ⅲ東斜面石垣 (4) 北方丘陵平場Ⅱ・Ⅲ境段整形 (5) 北方丘陵平場Ⅱ (6) 北方丘陵平場Ⅰ・Ⅱ境段整形 (7) 北方丘陵山頂の平場Ⅰ (8) 北方丘陵平場Ⅰ東斜面石垣
図版12　事業地外東方丘陵・南方尾根
(1) 東方丘陵と手前の平場Ⅴ (2) 東方丘陵尾根の竪堀等 (C), (3) 東方丘陵平場Ⅵ南方尾根の階段整形 (4) 東方丘陵平場Ⅶ東斜面段整形 (5) 事業地南方尾根と日枝神社 (6) 日枝神社 (7) 南方尾根上先端部 (8) 日枝神社裏斜面の段整形
図版13　事業地外南方尾根・周辺集落
(1) 南方尾根先端 (2) 南方尾根先端の坂ノ下墓園(3)南方尾根南西部の平場(4) 八幡神社・正覚寺 (5) 正覚寺墓地と横穴群 (6) 正覚寺裏の横穴墓 (7) 坂ノ下不動尊 (8) 久保横穴群内やぐら

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯（第１・３図）

千葉県南部は急峻な丘陵地形であるため，海岸沿いの国道が生活・産業・観光道路として主要なルートであるが，半島地形によって袋小路状を呈するため，しばしば渋滞を引き起こす。特に内房地区の国道127号線には幅が狭く歩道もないトンネルが多く，円滑な交通や危険防止のために，国土交通省は久保トンネルのオープンカット，坂ノ下トンネルの拡幅工事を計画した。

平成23年度から平成24年度，国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所は，千葉県教育庁教育振興部文化財課と土木工事を伴う開発区域と周知の埋蔵文化財の取り扱いについて協議し，当地区は宮ノ台遺跡の範囲に含まれることから，やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり，坂ノ下トンネル工事については「工事立会」，久保トンネル工事については「発掘調査」扱いであるが，急峻な斜面地で危険なことから，発掘調査は実施せず，地形測量と現地踏査から報告書作成までを公益財団法人千葉県教育振興財団に委託することとなった。当初の調査予定は夏期前であったが，夏の行楽シーズンの工事渋滞を回避するため，冬季の調査・工事計画がまとまり，11月の伐採後の12月に調査を実施する運びとなった。

平成26年度の組織，調査・整理期間・担当者などは以下のとおりである。

調査研究部長　伊藤智樹，整理課長　今泉　潔

調査・整理担当者　整理課　主任上席文化財主事　井上哲朗

調査　期間　平成26年12月１日～平成26年12月15日　　調査面積1,817㎡

　　内容　地形測量調査（委託）・周辺を含む現地踏査

整理　期間　平成26年12月15日～平成27年１月15日

　　内容　記録整理・トレース・挿図・図版・原稿・編集・報告書刊行

２　調査の経過と概要（第３～５図）

地形測量調査は，千葉国道事務所から工事計画図及び測量関係データの提供を受け，測量業者と委託契約した。多角・基準点測量後，現地に同行し，地形測量及び平場や段整形の測点・図化方法を指示した。

現地踏査は，対象地が広域な中世城郭の一部であり，国指定史跡里見氏城跡岡本城跡の城下集落推定域に隣接するため，丘陵内の中世城郭遺構の把握及び周辺集落の中世の痕跡を調査し，図化及び写真撮影を実施した。なお，地形測量及び現地踏査は，急峻で伐採後による身体を支える樹木がないため，ヘルメット・安全帯・ロープ等を使用し，強風及び雨天時には事業範囲の尾根上に登ることは避けた。

調査の結果，事業地内には，中世城郭関連遺構とみられる帯曲輪状平場・岩盤加工段整形・竪堀等が確認された。事業地外では，北方170mに位置する標高80mの丘陵頂部周辺を主郭・主要部と推測される，多くの平場や同様な遺構が確認されたが，遺物は発見されなかった。また，集落内の寺院境内地での石造物，聞き取りによる伝承・屋号等を調査し，直下に里見水軍末裔の伝承を持つ家の存在，里見家臣団の苗字を残す家等が確認された。以上により，本遺跡は，南南東に位置する岡本城ほどの明確な遺構造成はないが，砦的な機能を有した城跡であること，岡本城の城下集落が本遺跡周辺にも広がることが推測できた。なお，事業地外で古代横穴墓数基及び横穴墓改変再利用の中世「やぐら」を新たに確認できた。

貝塚
古墳
洞穴・横穴墓・やぐら
城館跡
0
(1/25,000)
1km
富山町
富浦町
南無谷海岸
原岡
大房岬
西浜
大半津
船形
川名
館山
宮本
福沢
青木
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

第１図　位置と周辺遺跡

第２節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境（第１・２図，図版１）

南房総市富浦町は，房総半島南西部西側に位置し，東京湾に面する。南房総地域の岩盤は，新生代第三紀（約2,000～3,000万年前）の不整合に堆積する黄白色～灰色の凝灰質砂岩の保田層・天津層であり，前者は掘削は容易ではあるが崩壊し易く，後者は比較的固い岩盤である[1)]。当地域は，こうした岩盤からなる山地が東京湾に流入する小河川や海による浸食を受けた，標高50m～100m（比高35m～85m）を主体とする丘陵地帯で，高い箇所では標高150m～200mとなる。

事業地周辺は，北西側が新田川・前田川，南東側が汐入川によって浸食された結果，北東から南西に連続する丘陵地帯に属する。その内，久保トンネルは，放射状に延びる支尾根の内，南側に延びる長さ約130mの尾根の基部近くに位置する。事業範囲は，南方に延びる尾根の基部に近い箇所から，東西30m・南北70m，標高は15m～45mである。尾根の東西両側は，対峙する尾根によって囲まれた幅100m～150mの谷津部分があり，海岸段丘や砂丘列が形成された部分であり，西側は大字「坂ノ下」，東側は大字「久保」の集落が形成され，いずれも海側に緩傾斜をなす，豊岡海水浴場に面する半農半漁村である。また，久保集落には汐入川による河岸段丘も形成され，南南東には久保トンネルから300m程隔てた丘陵（岡本城跡）が接し，その南側には岡本川によって形成された南北幅1.5km の沖積地が広がる。

２　歴史的環境（第１・２図）

当地域は，海岸で縄文時代洞穴，沖積地の砂丘列上で縄文時代～奈良・平安時代集落，丘陵地帯で古墳時代横穴墓群・中世やぐら群・中世城館跡が分布する。第１図で示した遺跡分布の内，本遺跡の時代である中・近世遺跡については番号を付した。中世城館跡は，南房総市富浦町宮ノ台遺跡(1)・岡本城跡(2)・宮本城跡(3)・床城（とこじょう）城跡(4)・宮本手代遺跡(5)・当城（とうじょう）城跡(6)・船形城跡(7)，同市富山町冷水城跡(8)・高崎要害山城跡(9)，近世以降城館跡は，館山市船形陣屋跡(10)・南房総市大房の御台場跡(11) である。また，中世前期主体の納骨・供養施設である横穴「やぐら」は，南房総市富山町小浦やぐら(12)・名ノ内やぐら群(13)・石塚やぐら(14)，同市富浦町山崎横穴群(15)・谷東横穴群（和田やぐら群）(16)・坂本やぐら群(17)・久保横穴群(18)・下ノ坪やぐら群(19)・青木やぐら群(20)・当城やぐら群(21)，館山市大福寺やぐら群(22)・那古寺やぐら群(23) が確認されており，古墳時代の横穴墓を改造し再利用したものも多い[2)]。

中世は，本遺跡も関連する遺跡と推測される岡本城跡が近接するため，同城を本拠とした戦国大名里見氏の動向について概略する。里見氏は，15世紀前半の鎌倉公方足利氏側と関東管領上杉氏側の対立に伴う享徳の大乱等の関東戦乱の中で，上野国（群馬県）から公方方として房総に入部し，安房地域の領主層を取り込んで勢力を拡大した。東京湾を隔てた後北条氏と対抗し，一時は安房・上総国大半を抑えたが，下総国に勢力を拡大した後北条氏と君津・山武地域を境に攻防を繰り返し，1590年の小田原城落城時は豊臣方として残った。その間，当初は白浜城（白浜町　宗主里見義実），次に稲村城（館山市　宗主里見義通・義豊）を本城としたが，天文の内乱（1533年）では，宮本城・滝田城（南房総市三芳村）が里見義豊方，久留里城（君津市）・佐貫城（富津市）が里見義堯・義弘方の拠点城郭として対立し，後者が勝利する。里見義弘没後の天正の内乱（1578年）では，義頼・義康（岡本城）と梅王丸（佐貫城）が争い，勝利した義頼の岡本城が里見宗家の本城となった。豊臣秀吉方による後北条氏本城小田原城落城後天正18（1590）年には，義康は館山城に移ったが，1614年伯耆国（鳥取県）へ改易となった。

第２図　明治時代地形図

16世紀後半には，造海城（富津市）が里見氏家臣正木氏の本城となり，里見水軍の拠点として機能した。宮本城も岡本城の支城として機能した可能性が指摘されており，高崎要害山城や宮ノ台遺跡，床城城・宮本手代遺跡・当城・船形城等の多くの城館は，15世紀後半以降の岡本氏他の在地領主の城が廃城し，16世紀末には里見氏本城岡本城の支城や家臣等の拠点として機能したものがあることも推測される[3]。各城跡の構造等については，第２章で後述する。

現富浦町域は，古代は「平群郡」，中世は「北郡」，近世は「平郡」に属していた。当地域の集落は，近世には概ね汐入川を境に北西が「坂ノ下村」，南東が「塩（汐）入村」と分けられていたが，18世紀代の一時はいずれも岡本村に含まれていた。明治維新後には坂ノ下村と汐入村が合併して豊岡村，明治22年には富浦村に統合，明治30年に安房郡に帰属，昭和８年に富浦町，昭和30年に八束村と合併し，平成18年に南房総市に統合された。また，久保トンネルを含む海岸沿いの道路は，明治時代後半の開通である[4]。

第２章　城郭遺構と周辺集落

第１節　事業範囲内（第３図，図版４～10）

概要

事業範囲は南方に延びる尾根の基部に近い箇所で，尾根筋の高さは尾根基部方向の北側が最も高く，尾根先端方向の南方に徐々に低くなる。東西の斜面は崖面ともいえる急角度であり，久保トンネルの上方の西斜面と北部の西崖に開口する横穴（稲荷祠）内外には，岩盤崩落防止のためのコンクリート吹付が施工されている。随所で岩盤が露出し，土砂堆積部分も薄い。第３・４図では，前者は崖のマークとし，後者部分にはコンタを入れたが，岩盤露出が１m四方範囲程度以下の箇所は省略した。丘陵頂部平場１条の他，東斜面を中心に帯曲輪状平場（段）13条，岩盤加工段整形３か所，石垣１か所，竪堀１条が確認された。

尾根頂部付近（図版４・９）

尾根頂部の標高は，事業範囲北端部が45.3mで，徐々に低くなり，トンネル上方が33.1mと最も低く，南端部では少々上がり33.7mである。トンネル上方の尾根筋上の一部から西斜面はコンクリートが吹き付けられていることから，近年に若干削平されたことが考えられる。尾根筋の平場は，幅１m～３mで，自然地形をある程度残しながらも通路として使用されてきたものと考えられる。

北部の尾根頂部では岩盤が東寄りに４段の階段状になっており，現在の通路はその西側を経由して最後の段の東側を通って北方へ抜けるルートである。この段差は，人為的な整形と推測されるが，１段の高さが50cm前後と階段としては規模が大きいため，崩落防止と同時に，城郭としての遺構であれば，往来の障害ともなり，兵を配置するための段の可能性も考えられる（図版８（1）・(2)）。

南部では，コンクリート吹付部分の南に高さ１mほどの崖面が通行を阻む（図版８（3））。過去のコンクリート吹付工事の際に長さ約24m部分が削平された可能性が高いが，段差手前の東斜面に縦方向の竪堀状の溝があること（図版８（4）），これは後述する様に竪堀と段差の組み合わせが周辺で他に２か所みられること，段差の先に５m程の長さで高まりがあること（図版８（5）），その東側に２段の段差が造成されていること等から，後世に若干の削平を受けながらも城郭遺構の可能性が高いと推測されるものである。

仮にA地点としておく（第５図）。

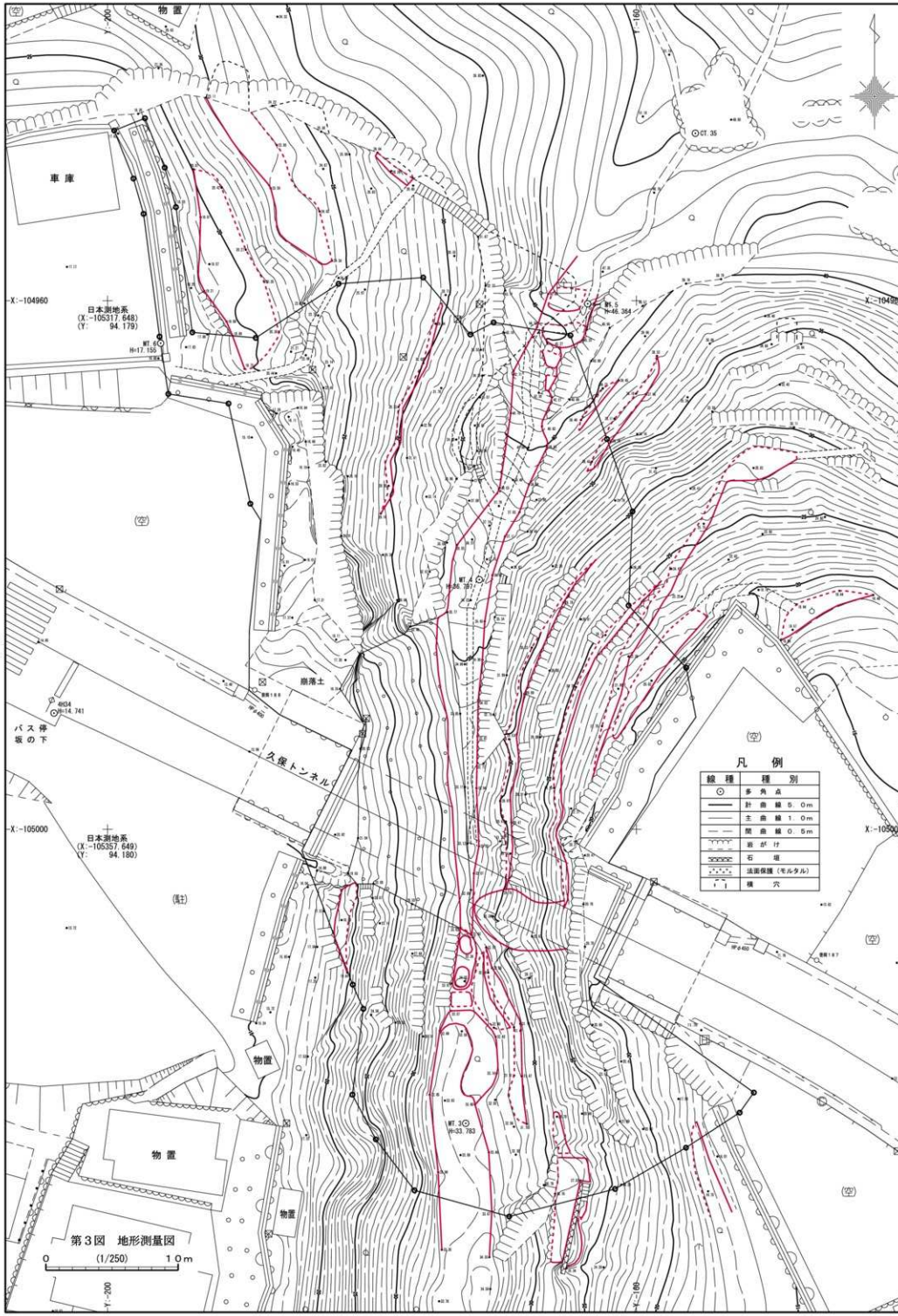
なお，南端部の尾根筋直下の東斜面には幅１ｍ～1.5ｍの平場が整形され，その西側壁は岩盤を垂直に落としたものである（図版８（6））が，東端以下は高さ1.5ｍ程の石垣で補強されている（図版８（7））。この南方には日枝神社が存在し，その裏から登る階段や小規模な平場も整形されている。この石垣は，一辺20㎝～40㎝の直方体の地元の切り出し凝灰岩を積んだものであるが，殆ど無加工の岩石を積んだ石積みも周辺丘陵内で東から南側斜面に随所にみられる（後述）。当地域では，近世以降ビワ栽培，昭和30年代以降はソテツ栽培も盛んとなり[5]，多くの段とその補強のために，石垣・石積みが造られたことが推測される。ただ，岡本城跡内にもあって考察されている様に，山中の全ての石垣・石積みを伴う段差が近世以降とはいえない[6]。各石垣・石積みについては，改めて各地区の様相の中で触れていきたい。

西斜面（図版２・５・６）

事業範囲の北西部では，斜面に２段の平場が造成され（図版９（2）・(3)），下段の平場の南端部が事業範囲にかかる。上段から上の崖面にかけては，古代横穴墓の可能性のある穴（図版９（3））が手前を削られて２基並ぶが事業地外である。登坂道は２段の平場の脇から北東に斜めに登り，崖面前で崖に沿って整形された階段を登り稲荷祠のある洞窟（図版９（5））前まで行き，尾根筋に沿って南下後，階段整形（図版９（7））を登って頂部に達する。稲荷祠の洞窟は，平面形が三角形に近い台形で，開口部幅約11ｍ・奥行6.5ｍ，高さ約２ｍ前後である。内部は奥へ低くなり，最奥部は雑に刳り貫かれて石製祠が安置される。トンネル開削工事はこの内部までは至らずに横穴直上の尾根上部が削平される。平成23年12月の踏査段階では岩盤が露出していたが，その後今回の工事に関連した保護のため，コンクリート吹付が実施されている。祠には大字坂ノ下の個人の家の繁栄等のお札があり，地元での聞き取りでも近代以降の設置とみられる。恐らく，古代横穴墓或いは岩盤崩落部分を改めて掘削したものであり，高度的には海蝕洞穴ではない可能性が高い。久保横穴群８基の内の近世祠跡かとされる「やぐら」２基の内の１基とみられる[7]。その他，北部斜面中腹には幅30㎝前後の狭い平場がみられ，南部のコンクリート吹付部分下方に接する幅１ｍ程の平場があるが，いずれも近年の小道とみられる。

東斜面（図版４・５・７・10）

南寄りの竪堀状の溝から北側は幅30㎝前後の帯状の平場が３条，下方に幅１ｍ程の平場が１段造られており，随所で岩盤が露出している。段の下には補強のために自然岩を積み重ねた箇所もある。東斜面下のお宅の方の話では，50年前には既に斜面の段にビワが栽培されていたとのことであるが，城郭の帯曲輪状平場を利用した可能性も残しておきたい。北側の事業範囲境には，斜面上方の崖下に幅30㎝前後の段が２条存在する。事業範囲南端部の石垣を伴う平場は尾根頂部付近の項で既述したが，下方にも幅1.5ｍ前後の平場が２段造成されている。ただ，下の段は擁壁により下方がカットされている可能性がある。竪堀は，尾根頂部から幅3.5ｍ前後，比高10ｍ程である。土砂堆積の現状の掘り込み（段差）は１ｍ程で，その下の形状は不明確であるが，堀斜面上部に露出する岩盤の傾斜から推測すると，城郭の空堀の様な深い掘り込みではないようである。久保トンネル直上北寄りには，岩盤を繰り抜いた小横穴が存在する。幅１ｍ・高さ60㎝・奥行80㎝の縦断面半ドーム型で，近世以降の水溜め施設または石祠を納めた穴とみられる。


物置
車庫
日本測地系
(X:-105317.648)
(Y: 94.179)
X:-104960
崩落土
バス停
坂の下
久保トンネル
日本測地系
(X:-105357.649)
(Y: 94.180)
X:-105000
凡例
線種
種別
多角点
計曲線 5.0m
主曲線 1.0m
間曲線 0.5m
岩がけ
石垣
法面保護(モルタル)
横穴
物置
物置
物置
0
(1/250)
10m

第3図 地形測量図

第２節　周辺丘陵内（第４～７図，図版８・10・11～13）

概要（第５図）

本遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地である中世城館跡として確認されたのは，県教育委員会による中近世城館跡詳細分布調査[8]であり，それ以前の分布地図[9]には掲載がない。詳細分布調査報告書には，範囲と地名表のみの記載であるため，今回は調査票の記載[10]を参考に踏査した。事業地は，広域的には北東－南西方向に延びる丘陵から随所で延びる尾根の内，南方に延びる尾根筋に位置する。事業地から北方170mには標高80mの周囲よりひときわ高い山があり，周囲の尾根筋には，削平による平場が連続し，石垣や段差も随所に見られることから，本城の主要部に推測され（北方丘陵），事業地の50m程北側では空堀や平場（尾根基部），その東方の尾根筋（東方丘陵）では虎口に推測される造成などが確認されていた。よって，改めて城跡か否かを検証し，事業範囲部分が城の中で占める構造上の意味を把握するために踏査を実施した。なお，通常は，城の構造説明は主郭から周囲の順であるが，本遺跡では城として不明確な点があるため，事業範囲から丘陵の奥（北方及び東方）へ進み，最後に南方尾根を踏査する形で記述することとする。

尾根基部（第５図，図版10・11）

事業範囲の尾根を登りきった地点では，高さ１m程の岩壁があり（図版10（7）），その脇から北方下に小道が竪堀状に落ちて空堀状の底に達し（Ｂ地点），北東に延びる谷津に連続する（図版10（8））。谷津頭に該当する箇所ではあるが，断面は薬研堀状となり，標高が高く，自然地形としては不自然なことから，人工的な造成の可能性が高いと考えられる。下方の谷津内には畑であったとみられる平場が段々に連続する。なお，都市計画図に表されていない段は，加筆したものであり，城郭遺構として表現したものではない。

北方丘陵（第５図，図版11）

Ｂ地点の空堀状谷津頭を右に細尾根を通り，斜面を登ると平場Ⅳ（図版11（2））である。幅５m前後・長さ35mで，東北端に高さ20cm程の土塁状の高まりが沿う。この高まりは，平場Ⅰ～Ⅲの東側と共通するが，平場Ⅰ～Ⅲでの高さは50cm前後とやや高くなる。しかし，いずれも防御には適さない低さであり，平場の一辺のみなので，削平時の掘り残しの段であろう。平場Ⅲ東斜面では，石垣・石積みで補強された段が連続し，平場Ⅲ直下のものは高さ1.5m程の整然と造られた石垣である。平場Ⅲは，幅５m前後・長さ20m程の平場である（図版11（5））。奥には高さ１m程の岩盤整形の壁面が整形されており（図版11（4）），その上が平場Ⅱで，幅５m前後・長さ20m程の平場である（図版11（5））。平場Ⅰへは斜面で区切られるが，その斜面で２か所の石積みと小規模な段が造成されており，植栽の痕跡はない（図版11（6））。平場Ⅰは幅１m～５m・長さ30m程の平場で，ソテツが植栽されている（図版11（7））。平場Ⅰの北から東斜面には，道状の細い平場が複数造成されているが，東斜面の石垣（図版11）（8）は平場Ⅲの東直下の石垣同様に整然と積まれたものある。平場Ⅰの西斜面の石垣・石積みを伴う多くの段は，ソテツが植栽されている。

なお，久保トンネル東側に近接する家の方のお話では，背後の山中に塚があり，かつては「白塚山（しらたかやま）」と呼ばれていたとのことであるが，塚は確認できなかった。恐らく，「白塚山」の「白」は岩盤色または城で，北方丘陵内の標高80mの山頂部を中心とした一帯を指し，塚或いは物見台状施設があったが，近年のソテツ植栽等の造成により削平された可能性も考えられる。

東方丘陵（第５図，図版11・12）

Ｂ地点の東方には，岩盤を削平した幅５m～10m，長さ20m程の平場が存在し（図版12（1）），岩盤に

角柱を立てる掘込みが残存する。地元の方の話では，数10年前には小屋があったが大風で壊れたとのことである。この平場から東方への尾根上に土塁状の高まりと竪堀状整形が存在し，南側斜面の小道から尾根の西及び東へと続く出入口となっている（C地点　図版12（2））。仮に敵兵が東方から尾根伝いあるいは南斜面から登ると，竪堀内の岩壁と尾根上の高さ１m程の岩壁があり障害となり，城の虎口的構造である。

東方尾根上には２つの頂点があり，仮に平場Ⅵ・Ⅶとしたが，上面は緩やかな傾斜地で，削平されてはいないとみられる。平場Ⅵから南方に延びる尾根上は道として使われたようで，急斜面には階段整形が行われている（図版12（3））。また，東西両斜面に平場が造成されているが，南東斜面の平場はビワ栽培等のための畑として使用されている。平場Ⅵ・Ⅶ間の尾根には，南北斜面に平場が造成されており，北斜面は帯曲輪状でC地点から連続する道としても使用されたものとみられる。平場Ⅶ周辺は，東斜面の石垣・石積を伴う段が造成されており（図版12（4）），ビワ栽培の段とみられる。

南方尾根（第５図，図版12・13）

尾根筋は幅１m前後で，先端部付近で狭くなり，その東斜面に小規模な平場がある（図版12（7））が，斜面崩落でできた可能性が考えられる。ただ，その下，日枝神社西側裏斜面の段（図版12（8））は人為的造成である。社殿北西側には段整形と石垣が存在する（図版８（7）　第１節　尾根頂部付近で既述）

日枝神社（図版12（5）・（6））は，聞き取りによると，現在は御神体を八幡神社に移してあり，社殿も朽ちかけているが，豊岡の祭時には八幡神社と日枝神社の両方の幟を立てるとのことである。なお，境内の東斜面には２段ほどの段整形が存在するが，現在は藪のため，不明瞭である。神社の石段の左手，尾根先端の坂ノ下霊園との境には平場が造成されている。

尾根先端部は削平されて，「坂ノ下霊園」として共同墓地が営まれている（図版13（2））。古い石仏や墓も随所に見られるが，江戸時代後期（18世紀代）以降である。

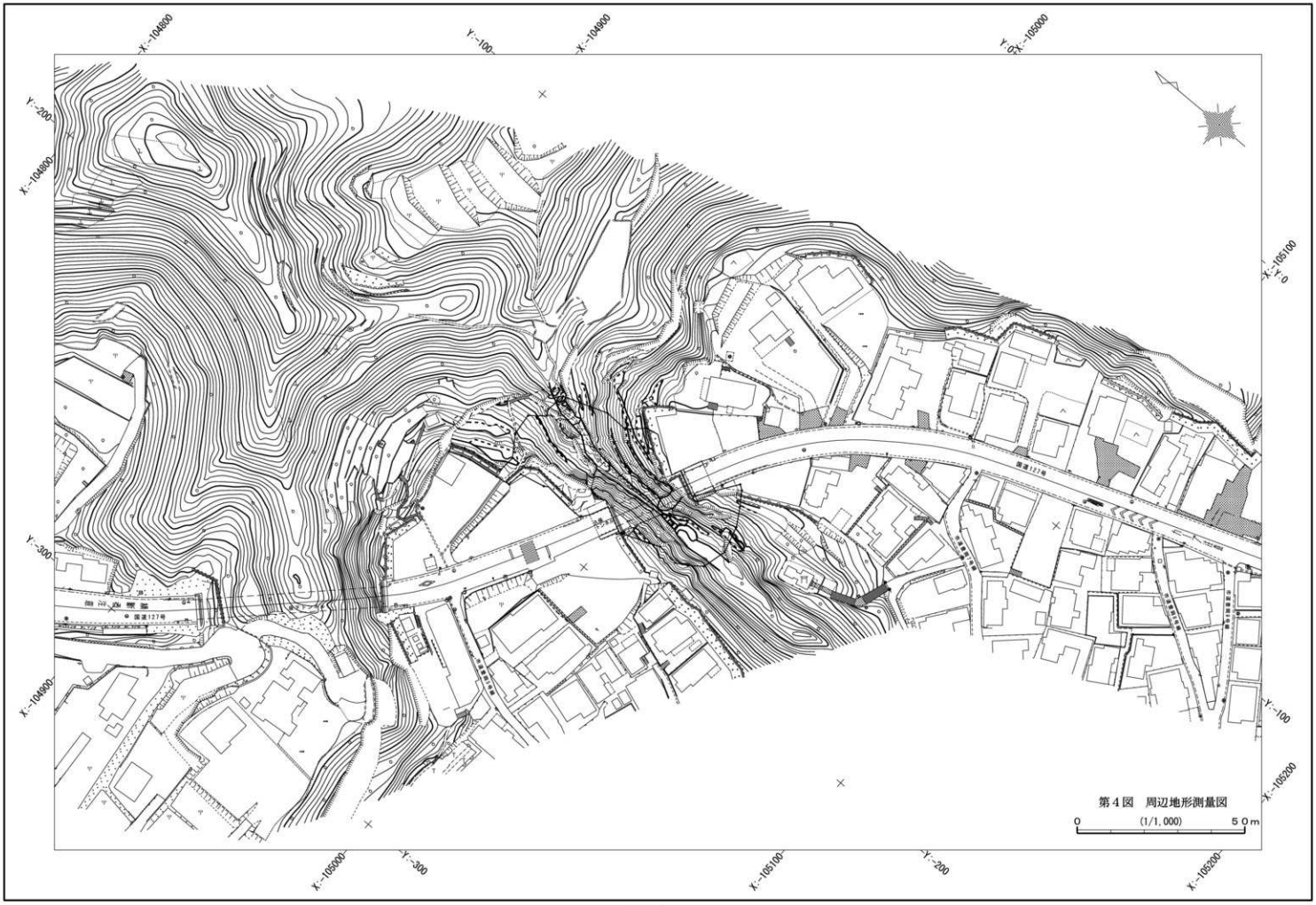
南西端には長さ20m程の平場が造成されているが，ソテツの植栽痕跡がある（図版13（3））。また，西側斜面には横穴が１基開口するが，防空壕あるいは物置として使用されたものである。

周辺城郭との構造等比較（第５図）

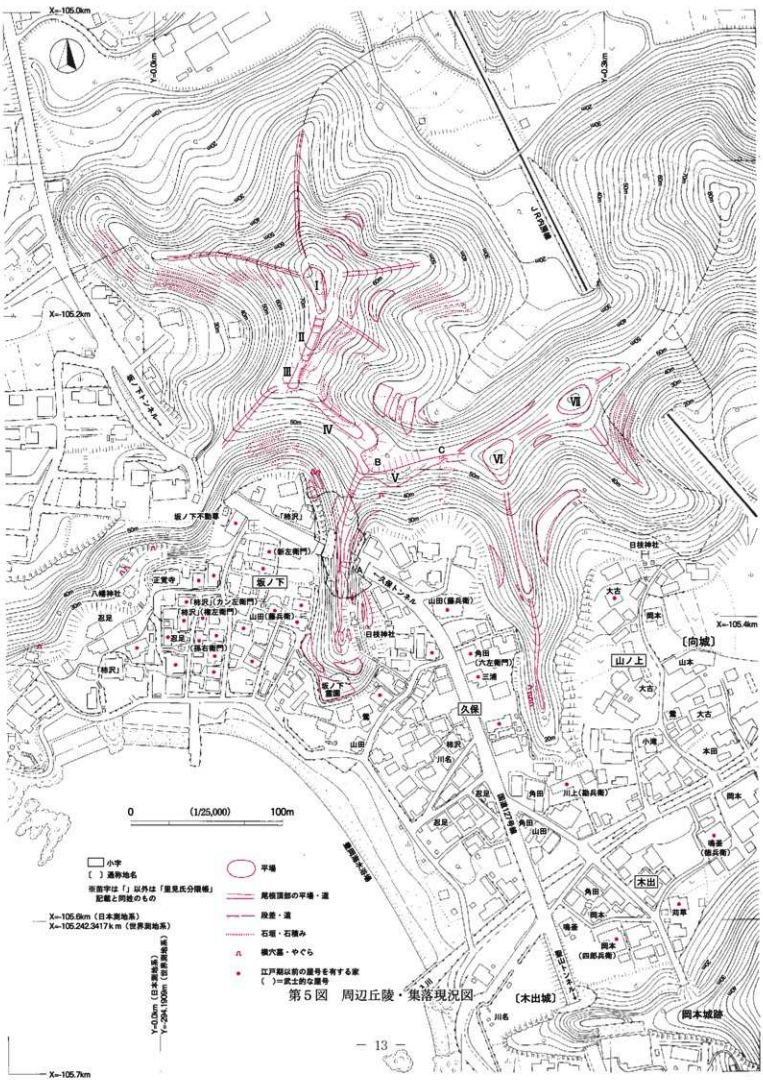
南方に近接する岡本城跡は，16世紀末の里見氏本城であり，本遺跡はその関連の城跡と推測されているので，その他周辺城館の構造等について簡単に記す。

岡本城跡は，山上及び斜面を広く削平して連続させており，空堀・土塁・石塁・垂直切岸が存在し，地名は「要害」が残る。一方，古い段階と推測される宮本城跡は，山頂には狭い主郭があるが，周囲に腰曲輪を多く配置しており，空堀・土塁・石塁・垂直切岸が存在し，地名に「城山」が残る[11]。また，里見氏の拠点城郭であったと推測される高崎要害山城跡は，尾根上に小規模な平場を連続させ，腰曲輪を配置し，空堀・土塁・石塁・垂直切岸が存在し，地名に「要害」が残る[12]。また，当城城跡は，比較的広い平場が存在し，堀切が存在し，地名で「当城」が残り，忍足氏の城跡としても伝わるが，土塁以下の施設が不十分で構造は充実したものではない[13]。

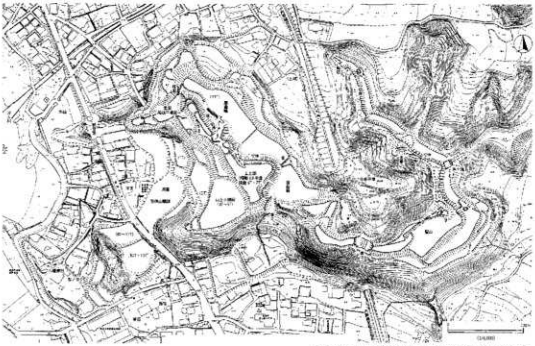
その他の周辺の床城城跡・宮本手代遺跡は，主要郭とする平場は存在するが，腰曲輪が少なく，空堀・土塁・石塁・垂直切岸等もほとんど存在せず，城郭地名も存在しない[14]。本遺跡も同様であるが，これらの簡易な構造の城郭は，里見氏直系の城ではなく，里見氏入部前からの岡本氏等の在地小領主層が本拠とした，戦時のみのために造られた城跡の可能性も考えられる。


X:-104800
Y:-100
X:-104900
Y:-0
X:-105000
Y:-200
X:-104800
Y:-300
X:-104900
X:-105100
Y:-0
Y:-100
X:-105200
X:-105000
Y:-300
X:-105100
Y:-200
X:-105200
国道127号
0
(1/1,000)
50m

第４図　周辺地形測量図

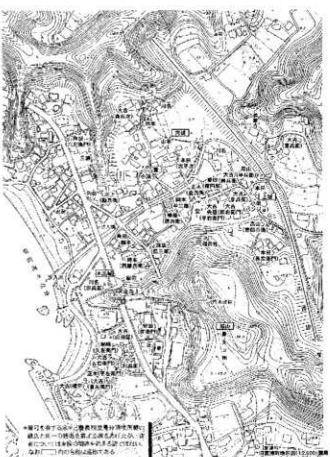


第５図　周辺丘陵・集落現況図



『千葉県南房総市岡本城跡確認調査報告書』
（南房総市教育委員会　2008年）より転載

第６図　岡本城跡概念図



『千葉県南房総市岡本城跡確認調査報告書』
（南房総市教育委員会　2010年）より転載

第７図　岡本城下集落現況図

第３節　周辺集落（第５～７図，図版８・10・11～13）

概要

事業地の尾根の東西にあたる，大字「坂ノ下」と「久保」ににいて，寺社を踏査し，屋号・伝承等について聞き取りを行った。苗字や屋号は，岡本城下調査の際に実施された[15]範囲の外側を調査し，その連続性を確認するためでもあった。しかし，個人情報と考えられるため，第５図では里見氏家臣と同姓の家と江戸時代以前の武士的な屋号のみ記し，他の家は記号のみにとどめた。なお，中世まで遡る石塔類は発見できなかったが，古墳時代横穴墓を再利用した中世の「やぐら」とみられる穴が確認された。

坂ノ下集落（第５図，図版13）

坂ノ下の谷津の北西部に八幡神社と正覚寺が並ぶ(図版13(4))。八幡神社は，祭神は誉田別命(応神天皇)，創建は元暦元（1184）年と伝えられる。正覚寺は，真言宗智山派で山号は仏法山，本尊は聖観世音菩薩，開基は寛弘３（1006）年と伝えられる[16]。墓地内には江戸時代後期～現代までの墓が並び（図版13（5）），古い石仏・墓石は18世紀代である。正覚寺裏墓地の南東斜面には横穴が４基確認された。４基の内，下のレベルの２基は防空壕または倉庫として利用された痕跡があり，確実な古代横穴墓は２基である。国道沿いの坂ノ下不動尊は，内部の本尊を実見する限り，精緻な金属製であり，江戸時代後期以降のものと推測される。

屋号や伝承の聞き取りでは，出口家が多いが，里見氏関係史料[17]には登場しないため，近世以降の入部と考えられる。里見氏家臣関係では，忍足家が見られる。また，やはり数が多い柿澤（沢）家は，史料には見えないが，聞き取り調査では，里見家の右筆の伝承があるとのことである。

久保集落（第５図，図版13）

事業地の東側に南北に延びる尾根で，久保横穴群を再確認したが，その内の１基は奥壁が方形に刳り貫かれ，手前に木製扉が朽ちて落ちており，祠等に利用した改変が推測される（図版13（8））。中世に遡る石塔は確認できなかったが，形状的には「やぐら」の可能性もある。

聞き取り調査では，事業地のすぐ東側の谷津は，かつては山田家（屋号:藤兵衛）が広く所有しており，里見水軍の大将であったとの言い伝えが残るとのことである。他，里見氏家臣と同姓は角田・忍足・川名家等が見られ，坂ノ下より多いが，岡本城隣接区よりやや散漫になる。

第３章　まとめ

丘陵内の造成については，まず，多くの段・石垣・石積は，近世以降のビワや昭和30年代以降のソテツ栽培で使用されたものである。特に，石垣は方形に切り出した岩を丁寧に積んでおり，近年の可能性が高い。しかし，段や平場の中にはソテツは見えず，ビワも整然と植えられている様子がないものも多い。平場の削平された時期は，頂上部から西斜面にかけてのソテツ栽培の段造成に伴う昭和30年代の可能性が高いが，中世段階の造成も否定はできない。これらの石垣・石積を伴う段は，岡本城跡内にも見られ，全ての段が江戸時代以降とは断言できず，石垣・石積が後で段の補強として工事された箇所がある可能性も考えられる。一方，中世城郭構造の可能性が高いものとしては，竪堀と岩壁のセットが３地点で共通する構

造であり，尾根上の移動に対する防御施設の可能性が高いことが考えられる。

周辺集落については，特に近世以降，半農半漁業の町として発展したことが確認できるが，里見水軍の伝承，「やぐら」の存在，里見家臣の苗字の家が岡本城近辺より散漫になりつつも展開すること等から，岡本城の城下集落の外縁部であり，中世末期には，漁師でありながら，水軍（海賊）としても行動した集団の本拠であった集落であったことが想像できる。

以上，城郭としては，随所で尾根に通行障害箇所を設け，標高の高い主要部周辺や南方丘陵先端部に平場を多く配置するもの程度の簡易的構造であることや里見水軍の伝承等から，通常は見張り台的に機能し，戦時には集落（水軍）の避難施設となった簡易な城であった可能性が考えられる。

注１　富浦町教育委員会　1998『富浦町史』

２　第１図の遺跡分布図は，主に下記文献等を基に作成した。

①千葉県　1996『千葉県やぐら分布調査報告書』

②千葉県教育委員会　2000『千葉県埋蔵文化財分布地図（4）－君津・夷隅・安房地区（改訂版）－』

③（財）千葉県文化財センター　2003『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』

④南房総市教育委員会　2010『千葉県南房総市岡本城跡調査報告書』

⑤千葉県教育委員会「ふさの国文化財ナビゲーションシステム」（千葉県ホームページ内文化財地図）

３　歴史的環境及び第２章の構造等についての参考文献は，以下のとおりである。

①柴田龍司　1985『千葉県中近世城館跡研究調査報告書　第６集　佐是城跡・岡本城跡発掘調査報告』千葉県教育委員会

②柴田龍司・松本　勝ほか　1998『千葉県の歴史　資料編　中世１（考古資料）』千葉県

③松本　勝　2000「高崎要害山について」『千葉城郭研究』第６号

④柴田龍司・滝川恒昭・遠山成一・松本勝ほか千葉城郭研究会　2002『図説 房総の城郭』国書刊行会

⑤松本　勝　2003「富山町高崎要害山城について」『千葉城郭研究』第７号

⑥増井有真・滝川恒昭・小高春雄　2008『千葉県南房総市岡本城跡確認調査報告書』南房総市教育委員会

⑦注２④と同書（小高春雄・早川庄司・滝川恒昭ほか　2010）

なお，同書に関わった当財団小高春雄上席文化財主事，及び近藤匡樹氏から地籍図等資料の提供を受けた。

４・５　注１と同書。

６　注３①と同書。

７　注３⑦と同書。

８　千葉県教育委員会　1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－』

９　千葉県教育委員会　1988『千葉県埋蔵文化財分布地図（4）－安房・夷隅地区－』

10　松本　勝氏の踏査による。

11　注１④・注３④・⑥と同書。

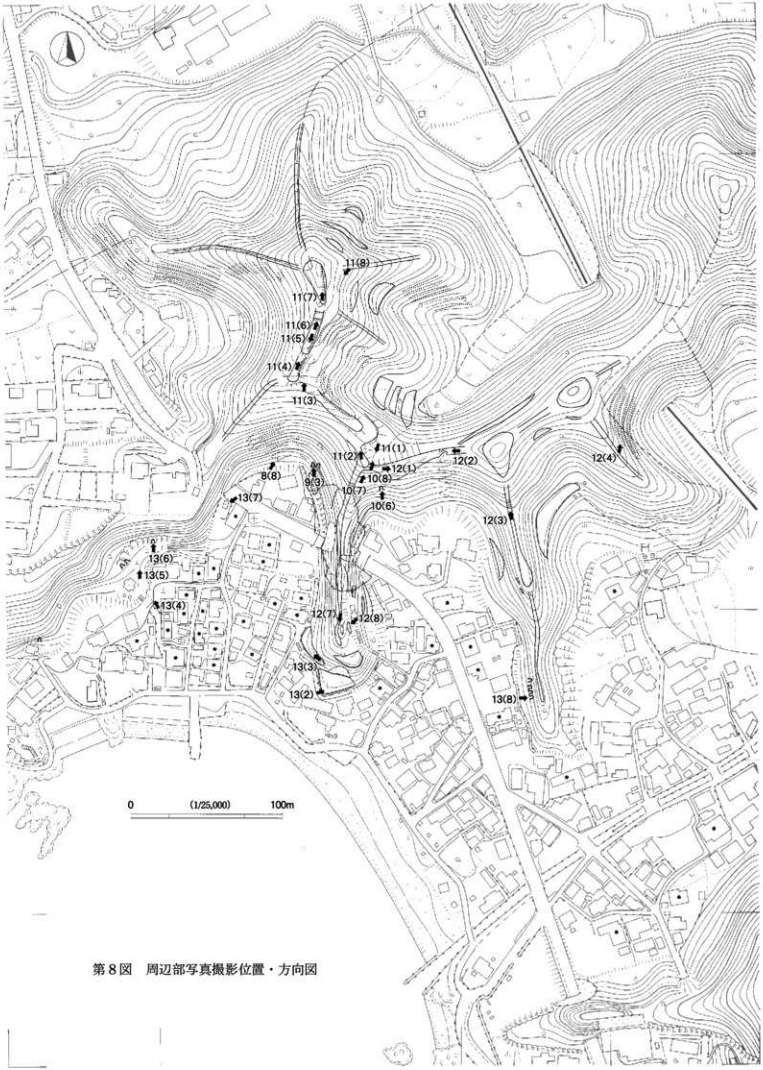
12　注３③・⑤と同書。なお，冷水城跡（8）は，遺跡分布地図（注２②・⑤）に未掲載であり，（8）の位置が高崎要害山城とされているが，注３⑤で松本氏は「要害」地名の位置や現地確認の結果，それを冷山城とし，北東丘陵上の新発見の城を同城と修正したいとしているので，その判断に従う。

13・14　注８のための調査票（注10）より。

15　注２④と同書。

16　注１と同書。

写　真　図　版



第８図　周辺部写真撮影位置・方向図

図版1

周辺航空写真（1967年）
（約1/5,000）

図版2

遠　景

（1）大房岬（南南西）から

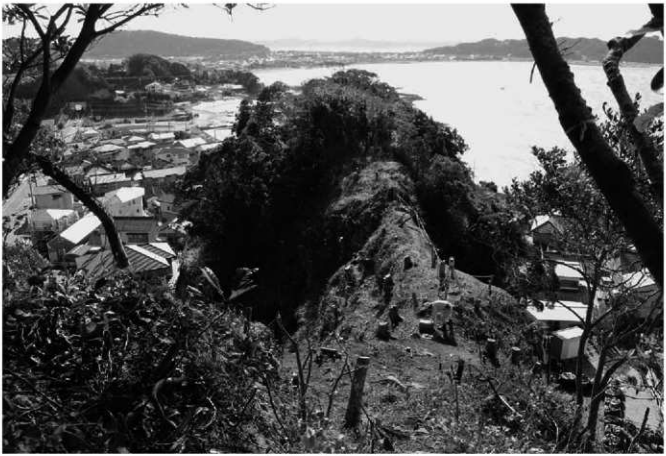
（2）八幡神社（西）から

（3）聖山トンネル（南南東）から

（1）大房岬・坂ノ下集落（事業地（北東）から）

（2）岡本城跡・久保集落（事業地（北西）から）

（3）岡本城跡（JR 富浦駅（南）から）



（1）尾根頂部全景（北から）

（2）尾根頂部～東斜面全景（南から）

（1）西斜面全景（西から）

（2）東斜面全景（東から）

図版6

（1）西斜面北部
（南西から）

（2）西斜面南部
（北西から）

（3）西側谷津内
（東上から）

（1）東斜面
（北北東から）

（2）東斜面南部
（東北東から）

（3）東斜面北部
（東南東から）

図版8

事業地尾根上部・西谷津斜面

（1）事業地北端部尾根上階段状整形（南から）

（2）北端部尾根上階段状整形（北北東から）

（3）尾根上南部段整形（北から）

（4）東斜面竪堀状整形（南東から）

（5）尾根上南部石塁状整形（南東から）

（6）南端部東斜面段整形（北から）

（7）（6）左下の石垣（南東から）

（8）西谷津北部斜面の石垣（南西下から）

事業地西斜面～東斜面

（1）西斜面北部（西下から）

（2）西斜面北部隣接平場（南から）

（3）（3）平場奥の横穴墓（南西から）

（4）西斜面北部事業地境界部（南東上から）

（5）西斜面北部稲荷祠窟（北西から）

（6）西斜面上部崩落個所（北から）

（7）北西端西側の階段整形（北東から）

（8）東斜面段整形（北から）

事業地東斜面・事業地外尾根基部

（1）東斜面南部（東から）

（2）東斜面中央部（東から）

（3）東斜面北部（南東から）

（4）東斜面下部（南東上から）

（5）久保トンネル上の小横穴（南から）

（6）事業地北東側斜面の横穴墓（南から）

（7）事業地北側尾根基部の段整形（南から）

（8）尾根基部の空堀状谷津（B）（南上から）

事業地外尾根基部～北方丘陵

（1）尾根基部の空堀状谷津頭（B）（北東下から）

（2）空堀状谷津西の尾根上平場Ⅳ（南から）

（3）北方丘陵平場Ⅲ東斜面石垣（南東から）

（4）北方丘陵平場Ⅱ・Ⅲ境段整形（南から

（5）北方丘陵平場Ⅱ（北から）

（6）北方丘陵平場Ⅰ・Ⅱ境段整形（南から）

（7）北方丘陵山頂の平場Ⅰ（南から）

（8）北方丘陵平場Ⅰ東斜面石垣（北から）

図版12

事業地外東方丘陵・南方尾根

（1）東方丘陵と手前の平場Ⅴ（西から）

（2）東方丘陵尾根の竪堀等（C）（東から）

（3）東方丘陵平場Ⅵ南方尾根の階段整形（南から）

（4）東方丘陵平場Ⅶ東斜面段整形（南から）

（5）事業地南方尾根と日枝神社（東から）

（6）日枝神社（南から）

（7）南方丘陵上先端部（北から）

（8）日枝神社裏斜面の段整形（北東から）

事業地外南方尾根・周辺集落

（1）南方尾根先端（南から）

（2）南方尾根先端の坂ノ下墓園（南西から）

（3）南方尾根南西部の平場（南から）

（4）八幡神社・正覚寺（南東から）

（5）正覚寺裏墓地と横穴群（南東から）

（6）正覚寺裏の横穴墓（南から）

（7）坂ノ下不動尊（北東から）

（8）久保横穴群内やぐら（西から）

報告書抄録

ふりがな	みなみぼうそうしみやのだいいせき
書名	南房総市宮ノ台遺跡
副書名	一般国道127号久保トンネル改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第741集
編著者名	井上哲朗
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の2　　TEL　043（424）4848
発行年月日	西暦2015年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
みや だい いせき 宮ノ台遺跡	みなみぼうそうしみやのだいまち 南房総市宮浦町 こえだいあざくぼ 豊岡字久保825-12ほか	234	002	35度 3分 24秒	139度 49分 42秒	20141201 ～ 20141215	1,817㎡	国道トンネル改築工事に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮ノ台遺跡	城館跡	中世	尾根頂部平場　1条 帯曲輪状平場　13条 岩盤加工段整形　3か所 石垣　1か所 竪堀　1条	なし	当城の主要部は，北方に続く丘陵山頂部に存在し，事業範囲はその外郭部にあたる。

要約	比高約30mの急崖部分であるため発掘調査は危険が伴うことから，事業範囲の測量調査と周辺部の踏査を実施し，事業範囲では竪堀や岩盤整形による段差等が確認された。周辺丘陵内には同様な遺構が展開すること，里見氏家臣や水軍の伝承を持つ家の存在等から，山下の集落は南東の岡本城跡城下集落が連続し，丘陵内の造成も関連が推測される。しかし，南東側斜面部の連続する段・石垣の一部は，近世以降のビワ・ソテツ栽培時の石垣・段差造成の可能性がある。

千葉県教育振興財団調査報告第741集

南房総市宮ノ台遺跡

―一般国道127号久保トンネル改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書―

平成27年３月20日発行

編　　集　公益財団法人　千葉県教育振興財団

発　　行　国土交通省　関東地方整備局
千　葉　国　道　事　務　所
千葉市稲毛区天台５丁目27番１号
公益財団法人千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1379